

# 互酬的贈与と交換における心的構造

文学研究科哲学専攻博士後期課程 3 年

山村 満衛

## 1. 序

本稿の目的は、マリノフスキーやモースの「贈与論」をもとに、経済的交換と、その基盤としての非経済的交換から成る社会の二重構造を明らかにすることである。＜市場社会＞を経済的交換と非経済的交換の混合する市場とみなし、その市場社会における市場的交換に伏在する観念体系を明るみにすることでもある。その試みは、互酬的贈与における贈与の行為を行わせる力をモースは社会の宗教的表象に求め、レヴィ＝ストロースは精神の無意識的構造に解決を求めたことが明らかにされる。本稿は、マリノフスキーやモースの一般的交換論の検討から市場社会の二層構造性を明らかにし、この二人の議論がレヴィ＝ストロースの言語的無意識構造の理論へ展開する論理を追跡するものである。

## 2. マリノフスキーにおける市場社会の二重構造

### 2-1. 〈クラ〉の非経済的システム

人類学における一般的交換理論で有名なマリノフスキーの「クラ」の検討を行う。マリノフスキーが行ったトロブリアンダ諸島の調査研究は、人類学、社会学、経済学に大きな影響を与えた。その研究の中で、とりわけトロブリアンダ諸島で行われている「クラ」という大規模な交換行為は、近・現代の市場的交換に対する理解を深めるものである。マリノフスキーによると「クラ」の定義は以下の通りである。

「クラとは、部族間に広範に行われる交換の一形式である。それは、閉じた環をなす島々の大きな圏内に住む、多くの共同体の間で行われる。」<sup>(1)</sup>

パプアニューギニアの東部沖の島々は円環状になっており、多様な言語・習慣を持つ人々が暮らしている。これらの島々を結ぶ線のルートに沿って、二種類に限る品物が、常に逆の方向に回り続ける。このうち、時計の針の方向に回るのはソウラヴァという赤色の貝の首飾りで、逆方向に回る品物が、ムワリという白い貝の腕輪である。どの島でも、どの村でも、限られた数の男たちがクラに参加する。参加者は、財貨を受け取り、短期間所有して、次に送る。この財貨を長期間所有することはない。一つの取引で、クラ関係が終結することはない。

く、「一度クラにはいれば、ずっとクラに属する」のが規則で、クラ関係に属する二人の間の相互関係は、終生続く永久的関係となる。また、ソウラヴァやムワリという財貨についても、一か所に落ち着くことはなく、常に所有者を変えるということから、「一度クラにはいれば、ずっとクラに属する」という原理は財貨自体にもあてはまる。以上、二つの品物を儀式的に交換するのが、クラの基本的な面である。

一方、このクラと並んで、原住民は日常品を手に入れるための物々交換を行っている。この物々交換はギムワリ（キリウィナ語）と呼ばれ、駆け引きを通じた交換である。

以上から、クラとギムワリを対比表にまとめると以下のようなになる。

クラ	ギムワリ
非経済的システム。市場メカニズムの外での交換。	市場メカニズム的な交換。値段交渉が可能な交換で価格の伸縮性がある。
儀礼的な交換行為で有用物の交換ではない。	貨幣が介在する市場交換ではないが、利欲や価格伸縮性、即時性等の市場的要素が混入している。
人格的交換	経済的交換
自発的・暗黙裡の等価交換で、等価物の選択は与える側にあり、交換物の等価性を相手に強要してはならない。交換を取り消すことはできない。	

ここに、マリノフスキーによりトロブリアンダ諸島に関し最もよく確証された互酬システムの記述を見ることが出来る。トロブリアンダの島民は人格的交換のクラと、市場的要素を含む交換のギムワリとの混同を絶対的に排除し、ギムワリをクラに付随する副次的な交換として位置付けたのである。ソウラヴァとムワリという二つの意味のない、全く実用性のない品物を交換していくという単純な行為が、部族間にまたがる大きな制度の土台となり、他の多くの活動を成功させたのである。カール・ポランニーは、クラ交易について次のように高い評価を行っているが、この評価が当時の経済人類学からする最も妥当な評価といえる。

「我々の公平の意味は、賞と罰によって妥当性を求めるが、財の互酬的運動は贈物の授受の見地から妥当性を必要とする。妥当性はこの場合、第一に正当な人間が正当な機会に正当な種類のものを返さねばならぬことを意味する。正当な人間とは、もちろん対称的に配置された人間である。たしかにそうした対称性なしには、互酬システムが含む複雑な授受関係は起こりえなかった。妥当な行為はしばしば公平と価値考慮の行為であり、・・・中略・・・それは1ポンドの肉に対するシャイロックの主張のように、古代法の「法的に厳格」な態度ではない。われわれはきびしい取引の実施を伴う互酬的贈物の習慣を、ほとんどどこにも見出すことがない。厳格さより公平さを選好させる弾力性の理由が何であれ、それは互酬の授受関係における経済的利己主義の現れを明らかに阻止する傾向にあるのである。」<sup>(2)</sup>

## 2-2. マリノフスキーに対する評価

マリノフスキーに対する評価は、現在でも一般的には以下のように言えるであろう。

1. クラは、異集団間（異部族間）の交換の土台となる信頼関係や交易ルート、交易ルールを自生的に形成し、共有化させ、また維持するための社会的ネットワークであることを明らかにした。
2. マリノフスキーにより記述されたクラから、我々は市場的交換の基層にはクラに象徴される市場的関係または経済的関係とは別の原理である非経済的な信頼関係や公正観念のネットワークが存在することによって、経済的交換がスムーズに行われうるという視座を得ることが出来た。
3. 2の視座を得ることによって、市場社会における信頼関係やルールという人格的交換の構造と、経済的な利得的交換という構造の二層構造的な存在を読み取ることが出来る。クラは市場社会の二層構造の象徴である。
4. 当時、西欧で主流であった非西欧社会や古代西欧に対する「原始経済」観は、人々が素朴な欲求を満足させることだけを考え、最小限の労働でそれを実現しようとする経済であった。この「原始経済」観の前提となっているのは、物質的で私的な利益を求める唯物的で功利的な人間像であり、それは市場経済を前提とした西欧の自己像の反映であるという批判的視座を確立した。
5. クラを経済制度の面から、人間性の基層とかかわる社会的現象であって、決して特殊な現象ではないことを示した。即ち、クラは富と有用物の交換に関する経済制度であり、そこでは人々は、物質的欲求を満たすために航海に乗り出すのでもなく、見返りを期待して到着者を歓待するわけでもない社会的事実を示した。

以上が、マリノフスキーに対する一般的な評価である。尚、参考までにレヴィ＝ストロースは、

『西太平洋の遠洋航海者』には「印象主義的批評と天才的学殖とが実に奇妙な形で同居しており、・・・、贈与論を読むものは、ほとんど例外なく、マールブランシュがデカルトを初めて読んだときのことを想起してみてもいみじくも述べたようなあらゆる種類の複雑な感情を抱かずにはおれない。胸は高鳴り、頭は興奮し、心は、・・・、間違いなく科学的発展の決定的事件に立ち会っているのだという思いに満たされるのだ。・・・、しかしながら、マリノフスキーのもとでは、モースが代数学にそって理解していた関数の概念—すなわち、社会的価値はあるものと他のものとの関数として理解されることを意味する—は素朴な経験主義的意味に変えられてしまって、もはや単に、慣習や制度が社会に与える実際の貢献しか意味しないのである。モースが諸現象の間の恒常的関係を念頭において諸現象を説明した場所で、マリノフスキーは、ただ単にそれらの諸現象がなにに貢献しているかを問題にし、その正当性を探るのである。この問題設定は、科学的価値のない公準装置を再び持ち出すのであるから、それまでの理論的発展を烏有に帰すものである。』<sup>(3)</sup> と、両義的な評価を行った。

### 3. マルセル・モースの市場社会の二重構造的性

#### 3-1. モースの『贈与論』

モースは『贈与論』の序文で、アルカイックな社会におけるクラのような現象には宗教的制度、法的制度、倫理的制度、経済的制度というあらゆる種類の制度が、同時に表出されているため、この種の現象を「全体的な社会的現象」<sup>(4)</sup>と呼び、その現象は生産と消費の何らかの特定の形態を前提とし、あるいは、給付と分配の特定の形態を前提としているとして、オセアニア、北米アメリカ、印欧古代世界の贈与の比較分析を行った。そして、モースの関心は、未開社会において、贈り物を受けた場合に、その返礼を義務付ける方法的経済規則はいかなるもので、贈られたものには、いかなる力があって、受贈者にその返礼をなさしめるかにあった。

モースによると、未開社会の贈与行為は、正確には完全に自発的で一方的な行為であったのではない。「理論的には、これらの進物は任意的になされるが、実際上では、義務的に与えられ、返礼される。」<sup>(5)</sup> 贈与は気前よくなされ、贈物は必ず受容されねばならない。贈物と等価物かそれ以上の価値の財を返礼しなければならない。受容拒否、返礼忌避は受贈者の面子を潰すため許されない。

北西部のアメリカインディアン間のポトラッチでは、気前のよい贈与を行なおうとして競争が生じ、貴重財をただ破壊することで気前よさを示すことさえあり、モースはそれを「競争型の全体給付」<sup>(6)</sup>と呼んだ。ポトラッチでは、「相互に義務を負い、交換し、契約するのは個人ではなく集団である」。<sup>(7)</sup>

即ち、贈与は提供と受容の権利・義務、消費と返礼の権利・義務が存する双務的な行為で、贈与は個人的な行為ではなく、他者に誇示する儀礼的行為で、集団を背負う共同体的行為であったということが出来る。しかし、そこには贈与に対し返礼を行うべきであるという契約は明示されていない。では、何故に、返礼が行われるのか？ モースはそれを「ハウ」への信仰であるとする。「ハウ」の事例として、ニュージーランドのマオリ族のタオンガ（ある特定の品物）に宿る霊的な力（ハウ）への信仰を挙げている。<sup>(8)</sup> そして、「タオンガ、或いはそのハウは、その保有者が彼の固有財産、タオンガ、所有物、労働、或いは饗宴、歓待、贈与の取り交わしによって、同等或いはそれ以上のものをお返ししない限り、彼らにつきまとうのであるが、ひとたび返礼がなされると、今度はその贈与者が、最後の受贈者となった最初の贈与者に対して、権威と勢力を行使する」と述べ<sup>(9)</sup>、ハウ信仰がサモア島やニュージーランドにおいて、富・貢納物・贈物の義務的循環を支配する主要観念であるとした。

以上のモースの「贈与論」から、以下の重要な論点を見いだすことが出来る。

1. 腕輪や首飾りが循環し続けるということは、贈与が体系として持続性をもっているということである。そして、持続性があるということは、個人の自由意志をこえた社会的位相があるということである。それが、義務ということであり、それを人に課すのは、「ハウ」の観



念である。

2. 「ハウ」の精神的な交通によって、贈与関係は二者間の贈与にとどまらず、多数者間に行われるレヴィ＝ストロースの言う「一般交換」が可能になる。ハウがタオンガに乗り、贈与が繰り返され、最初の贈与者に戻ることから、 $A \rightarrow B \rightarrow C \cdots \rightarrow A$ という多数者における円環的贈与システムが可能となる。そしてこの贈与システムは互酬的である。このモースの発見した互酬的贈与関係は、人や物に宿るハウの「恒常的な交換が位階や性や世代に分かれた諸個人及び諸氏族との間に存在するかのように、すべてのものが往ったり来たりする」<sup>(10)</sup>、ハウの交通ネットワークといえる。

3. モースの引き出したもう一つの重要な論点は、ハウやポトラッチの観念体系においては、その贈与者の人格的な抽象体であるということである。ハウにおいて、「何かを貰うということは、その者の霊の一部を貰うこと」(贈与者の一部)であり、タオンガという贈与財には「生命を付与され、個性すら与えられている」。<sup>(11)</sup>

従って、ハウの贈与関係は、単なる財の物象的關係ではなく、人格的關係であるということである。モースは、互酬的贈与システムの中に、諸部族、諸氏族という共同体を覆う人格的ネットワークの網の目を発見したのである。このことを、レヴィ＝ストロースは、モースは「社会生活を諸関係のシステムとして理解しようとした」<sup>(12)</sup>と評価したのである。ハウの互酬的贈与システムは、人々の人格的結合関係の総体であったのである。

## 4. レヴィ＝ストロースにおける互酬的交換の理論

### 4-1. レヴィ＝ストロースの両義的モース評価

レヴィ＝ストロースは、『マルセル・モース論文集への序文』で、マルセル・モースの『贈与論』について、両義的な評価を与えている。一方では、モースが提供・受容・返礼という三つの義務を見いだしたことは、贈与交換システムを社会関係の共通分母として構造主義的に把握したと評価し、他方では、その義務を行わせる力として恣意的なハウを持ち出したと批判した。モースは諸部分(三つの義務)を集めて全体を再構成しようとしたが、それが不可能であったので、交換が行われる原理を原住民のハウという主観的で恣意的な意見に求めたとした。レヴィ＝ストロースは、モース自身が定式化した《統合された全体は各構成部分よりもはるかに実在的である》という規則を贈与システムにも適用すべきであったとした。従って、このジレンマから脱け出す方法は、「交換こそが原初的な現象であり、社会生活において分化させられた作用ではない」ことをはっきりと把握することであった。

レヴィ＝ストロースにとっては、ハウは交換体系を説明する実在的原因ではなく、ハウ自体は思惟の産物なのであり、このハウこそが交換体系によって説明されなければならないのである。そして交換は原初的な現象であり、説明されるものではなく、交換から社会的事象が説明されなければならないのである。これこそが、『親族の基本構造』の方法でもあった。

レヴィ＝ストロースはハウとマナを、「意味をもたない」が故に「浮遊するシニフィアン」と解釈した。レヴィ＝ストロースは、人間精神は物事を理解できないときに空虚な概念を作り出すのであって、それは考察される物事の属性ではなく精神の無意識の構造を表出し、社会の象徴的起源を証明するような概念であると考えた。要するに、呪術理論におけるマナや贈与理論におけるハウの観念が明らかにするのは、言語の優位、更に言及するならば、想像界や現実界に対する象徴界の優位であるとなる。象徴は、究極的にはそれが象徴する現実よりも一層現実的になるのである。

そして、レヴィ＝ストロースにとって交換とは、「与える義務に始まり、受け取る義務およびお返し義務により、情緒的・神秘的な絆の助けをまって構成される複合的機構体系ではない」、それは、全人類の「無意識的な精神構造」の「象徴的思惟によって直接与えられる一つの総合であって、これは他のすべてのコミュニケーション形態におけると同じく交換においても、事物を対話の要素として自己と他者との関係のもとに同時的に知覚し、・・・本来的に自己から他者へ移転すべきものとして知覚するという交換に固有の矛盾を彫刻するものである」<sup>(13)</sup> ということになる。ハウやマナは、「知覚されないある全体の主観的反映」でしかないのである。

この「無意識的な精神構造」は、パプア人やメラネシア人という原住民の言語的特長に明白に現れているとする。原住民の言語では、貸す―借りる、買う―売るということをさす言葉が一つしかなく、対立的な作用が同じ言葉で表現されている。このことは、対立的な作用が全然《対立》していなくて、同じ実在の二つの現れでしかないことを証明しているのであって、対立がない以上、統一を示すハウによる交換原因の説明は必要がなかったのである。

真の対立を統合する客観的構造こそが「無意識的な精神構造」という象徴的思惟であり、マナやハウこそがこれを象徴するのであって、マナは内容のない形式、より正確には純粹の象徴であって、すべての宇宙論が作り上げる象徴の体系の中で、「ゼロの象徴的価値」<sup>(14)</sup>を示すものである。別の言い方をするならば、マナは「代数の記号のようなもので、それ自身は意味を持たずそれだけにまたどんな意味でも構わずに受け入れることができるので、意味的に不特定の価値を表象する。そして、その唯一の機能は、シニフィアンとシニフィエの間のずれを埋めること、あるいは、より正確に言えば、意味するものと意味されるものとのあいだの不全の関係が、あれこれの状況や場面あるいはこれらの観念の表明の際に、それ以前の補足の関係を破棄して確立されるのだという事実を表徴する」<sup>(15)</sup> ものである。この言辞こそが、「シニフィアンとシニフィエの不整合」を表徴する「ゼロ記号」なのである。

#### 4-2. 「ゼロの象徴的価値」または「浮遊するシニフィアン」について

レヴィ＝ストロースは、モースのハウのついての理論を批判し、ハウは交換にとって余計なものだとした。交換こそが、ハウという原住民の観念を要請するので、ハウが交換を要請するのではない。しかし、ハウは、パラドキシカルに、交換のただなかに出現するのである。

この問題は、未開社会のみならず、現代社会にとっても謎とされる問題である。未開社会独自の観念の問題というわけにはいかない。レヴィ＝ストロースは、この種の問題を観念の問題として一般化した。レヴィ＝ストロースにとっては、社会は「言語」と同様、他者とのコミュニケーションを可能にする象徴システム＝象徴的秩序として自律的な実在である。それ故、そこでは「言語」の象徴的秩序の問題となる。従って、マナの観念は、象徴的秩序そのものにある不整合性が要請する「普遍的な思考形式」ということになる。

では、この「不整合」はどのようにして出現するのだろうか。レヴィ＝ストロースの回答は次のようになる。言語の誕生がただ一挙にしかありえなかったように、事物は漸次的に意味を持つことはできなかった。言い換えれば、世界が一挙に意味あるものとなった時点で、言語の出現が知識の発展を早めたとしても、世界はよく知られたものとはならなかった。このことは、象徴的思考は不連続を示し、知識は連続性に特徴づけられるという、二つの間における基本的な対立を示している。象徴体系の意味作用は、無時間的・不連続的であるのに対し、知識＝認識は漸進的・連続的であるが、象徴体系においては、シニフィアンとシニフィエのカテゴリーは相互補完的に二つの系列のように、同時的に、且つ、連動して構築されるが、知識＝シニフィアンの一定の相と、シニフィアンの一定の相を相互に関連づけて同一化する、つまり、意味するものの全体と意味されるものの全体のなかから、両者の間にぴったりした関係を示す部分を選び取ることを可能にする知的過程は、極めて緩慢にしか進歩しないということである。

さらに、象徴システムは自己完結的ではなく、シニフィアンとシニフィエは一挙に相補的に与えられるが、シニフィアンとシニフィエ間には、神の理解力で持つのみ解決できる不均衡＝不整合がある。その結果、シニフィエに対しシニフィアンの過剰が存在し、この過剰はシニフィアン次第で決まることになる。つまり、シニフィアンとシニフィエの相補関係は、象徴的思考の条件なので、たしかに与えられているが認識されていないシニフィエを補う「浮遊するシニフィアン」が必要とされる。この「浮遊するシニフィアン」がゼロ記号＝ゼロの象徴的価値、マナの観念なのである。レヴィ＝ストロースはこのことを以下のように述べている。

「マナは、内容のない形式、もしくはより正確には純粹の象徴であって、それゆえにいかなる象徴的内容も帯びることができるのではなかろうか。すべての宇宙論が作り上げる象徴の体系のなかで、これは単にゼロの象徴的価値を示すものでしかならう。つまり、意味されたものがすでに帯びている内容を補充する象徴的内容の必要性（＝不在）を明示しながら、しかしまた、それがなお処分を留保されている部分をなしていて音韻学者のいわゆるグループ語をすでになしてはいないことを条件としつつ、一つの何らかの価値足り得る標識がそれであろう。」<sup>(16)</sup>

ここで注目される論点は、「シニフィアンとシニフィエの不整合」は、「構造」にとって外

在的でも偶然的でもなく、「構造」に必然的に内在するものであるという点である。そして、不整合は「構造」にとって本質的で、不整合こそが構造の変換を可能にすると考えられる。

## 《註》

- (1) 『西太平洋の遠洋航海者』 p146
- (2) 『人間の経済』 p94 ~ 95
- (3) 『マルセル・モース論文集への序文』（『社会学と人類学Ⅰ』所収） p25 ~ 28
- (4) 『贈与論』（岩波書店） p59
- (5) 『社会学と人類学』 p223
- (6) 同上 p228
- (7) 同上 p226
- (8) 同上 p239
- (9) 同上 p240
- (10) 同上 p244
- (11) 同上 p240
- (12) 同上 p32
- (13) 同上 p38
- (14) 同上 p42
- (15) 同上 p36
- (16) 同上 p42

## 参考文献

- |           |   |
|-----------|---|
| マリノフスキー   | 1974年『世界の名著59巻』中央公論社  |
| マルセル・モース  | 1982年『社会学と人類学Ⅰ』弘文堂  |
| マルセル・モース  | 1982年『社会学と人類学Ⅱ』弘文堂  |
| マルセル・モース  | 2008年『贈与論』勁草書房  |
| マルセル・モース  | 2014年『贈与論』岩波書店  |
| カール・ポランニー | 1985年『人間の経済Ⅰ』岩波書店   |
| カール・ポランニー | 1985年『人間の経済Ⅱ』岩波書店   |
| レヴィ＝ストロース | 1982年『構造人類学』みすず書房   |
| 同上        | 1973年『anthropologie structural I』PLON                         |
| 同上        | 1973年『anthropologie structural II』PLON                        |
| 同上        | 1987年『Intoroduction to the Work of MARCER MAUSS』<br>ROUTLEDGE |



## A Zero symbolic value in the RECIPROCAL GIFT and EXCHANGE

YAMAMURA, Mitsuei

In this discussion, Malinowski and Mauss work was analyzed using a coordinate axis that dual structure of the market society. The analysis was reached in theory “floating signifier” as “zero symbol” of Lévi–Strauss.

Lévi–Strauss interprets *mana*, *mana*, was considered to be one extra for the description of the exchange.

Lévi–Strauss, about *hau* and *mana*, was without the following important points out.

《But always and everywhere, those types of notion, somewhat like algebraic symbols, occur to represent an indeterminate value of signification, in itself devoid of meaning and thus susceptible of receiving any meaning at all; their sole function is to fill a gap between the signifier and the signified, or, more exactly, to signal the fact that in such a circumstance, on such an occasion, or in such a one of their manifestation, a relationship of non–equivalence becomes established between signifier and signified, to the detriment of the prior complementary relationship.》

Here Lévi–Strauss have said “mismatch of signifier and signified” is essential for the “structure”, only it is to allow the conversion of the “structure”.